

## 論文題目

「読む」ことを問う死者たち  
——「沖縄文学」における弔いを中心に——

仲井眞建一

## 【目次】

### 序章 沖縄文学をめぐる解釈

#### 第一部 目取真俊／解釈の拒絶を読む

第一章 目取真俊「風音（一九八五年）」論——「幼い性器」である死者と、食物としての死体

補論 目取真俊「風音」の改稿について

第二章 目取真俊「面影と連れて」論——「光」の記憶を〈聴く〉

第三章 目取真俊「魂込め」論——新城郁夫／ウタ、「祈りは届かなかった」場所に佇むこと

第四章 目取真俊「希望」論——「死体の傍ら」で〈私〉は希望を紡ぐ

#### 第二部 「読む」ことを問題化する死者たち

第一章 又吉栄喜「ギンネム屋敷」論——「悲鳴」を提示する「握りこぶし」

第二章 又吉栄喜『巡査の首』論——追悼・祭祀のポリフォニー

第三章 崎山多美「水上往還」論——「島」を読む〈私〉

補論 辺見庸『1★9★3★7』論——「できごと」を継承するために

#### 終章・結語／死者の不在を「読む」こと

#### 初出一覧

#### 参考文献一覧

## 【論文の要約】

本論の目的は「沖縄文学」がどのような状況で書かれ、どのような言説に対抗的に布置されているかを検証するものである。歴史的に「沖縄文学」は、中央に対する周縁と位置づけられてきた。こうした構造は、その文化、地理、言語といった特殊性を強調し、沖縄を「他者」としてまなざす欲望と表裏の関係にある。本論はテキストを分析することによってこうした構造を問い直し、「他者」として位置づけられてきた「沖縄文学」が、いかにして「自画像」を表出してきたかを考究しようとするものである。

そのために一九九〇年代から二〇〇〇年代前半の「沖縄文学」に注目し、特に目取真俊、又吉栄喜、崎山多美を取り上げた。いずれの作家もアジア・太平洋戦争によって生じたおびただしい死という「出来事」の継承を重要なモチーフとしている。生者の主張や議論が呼び込まれていく場が、死者およびその弔いの場である。生き残ったものたちが、さまざまに意味づけを行っていく過程で、その「解釈」の失敗がテキストに書き込まれていく。このとき「沖縄文学」は「解釈」の過程、それ自体を刻みつけていくことになる。そして読者もまた読むこと、「解釈」することの不安定な〈場〉に身を置くことになり、記憶や経験として明確な位置付けすら与えられない「出来事」性の問題を論じている。

第一部では、沖縄で書くことを問題化し、「他者」として沖縄を表象する構造に対し、常に鋭い批判を行ってきた作家として、目取真俊を取り上げた。第一章では「風音」を論じている。テキストの中心となるのは、「泣き御頭」と名付けられた特攻隊員の頭蓋骨を安置する沖縄県北部の風葬場である。この「泣き御頭」になんらかのメッセージや意味を読み込むのが、友達と「泣き御頭」で度胸試しをするアキラ、本土から取材に来た藤井、かつて「泣き御頭」から万年筆を盗んだ清裕といった登場人物である。本論では、テキストの発表時期（一九八五年一二月）とテキスト内の時間（一九八五年六月ごろ）がほとんど一致していることに注目し、その時期に中曽根首相（当時）の靖国神社公式参拝によって、戦死者の追悼と慰霊がどのように行われるべきか、問題化されていたことを指摘している。沖縄の遺骨収集における、死体＝物質としてとらえる議論を参照しつつ、テキストには死者との「観念的關係」（小泉義之、一九九七年）を結ぼうとする生者と、死体を食み、住居として活用する森の生物との対立が書き込まれていることを論じた。また補論「目取真俊「風音」の改稿について」では、初出、改定版の改稿過程を比較、検証した。特に長編小説『風音 The Crying Wind』（二〇〇四年）の改稿はテキストの同一性を揺るがすような変更だったと論じている。

第二章で取り上げたのは「面影と連れて」である。沖縄県・北部の村で「部落の神女」である「おばあ」とともに暮らす「うち」は、御嶽の森で過ごすようになる。やがて「魂」のことばを「聴く」ようになった「うち」は、沖縄海洋博の建設に訪れた「あの人」と心を通わせるようになる。しかし皇太子の来沖をきっかけに、「うち」や「あの人」は、暴力的な「解釈」にさらされていくことになる。他者を一義的に規定する「解釈」に対して、「うち」は、いまここにいない存在＝不在の他者を受容する「解釈」を行う。こうしたあり方は「うち」の身体に、必然的に暴力を呼び込んでしまうが、身体はそうした被傷性を必然的に抱え

ていると論じた。また写真が争点のひとつとなっており、ここに写真家・中平卓馬の「写真それ自体はなんら意味を持たないにも拘わらず、権力の意味体系へ接続されてしまう」という指摘を接続し、「聴く」ものの態度によって、語りが規定されていくことを指摘した。「うち」の語りは「聴く」相手を要求し、「聴く」ものの中に、不在のものを示しながら、「面影」を立ち上げると結論づけた。

第三章では「魂込め」を論じた。テキストは幸太郎という男の口にアーマン(大ヤドカリ)が入り込み、意識不明になってしまうという事件からはじまる。村の民間霊媒師・ウタは、幸太郎の意識を取り戻すために魂込めという儀式を行うがうまくいかず、さまざまな解釈を試み、アーマンは幸太郎の母・オミトの生まれ変わりではなかったかという結論に至るが、すでに手遅れとなり、幸太郎もアーマンも死んでしまう。本論はアーマンが常に「解釈」を失敗に迫りやる存在と定義し、ウタはその失敗を生き続ける解釈者であると「解釈」した。その意味で「魂込め」は解釈行為そのものを対象化し、その「解釈」が拒否されているという否定性を読むことを要請すると結論付けた。

第四章は「希望」論である。ある主体(名前は最後まで記されない)が米兵の幼児を誘拐・殺害し、犯行声明を出す。テレビや食堂などで事件に対する沖縄住民の反応を確認した後、ある主体はかつて米軍基地の反対集会が行われた公園で焼身自殺を遂げる。本論では動作主体の名を記述しないことによって、読むものが、名をあてがう構造になっていると論じた。このテキストは読むものが、描かれたある主体の行為を総合し、そこから導き出せる人物像を立ち上げると同時に、読むものがどのようにテキストを「解釈」したかということ露わにする。このことを踏まえた上で、テキスト内である主体は言葉を徹底的に無意味化しようとしていると論じ、希望とはそうしたテキストに対し、あくまで言葉を発するところにあると結論づけた。

第二部では「読むことを問題化するテキスト」として、又吉栄喜と崎山多美のテキストを取り上げた。第一章は又吉栄喜「ギンネム屋敷」論である。ギンネム屋敷に住む「朝鮮人」が「知恵遅れ」のヨシコーを犯したと聞いた「私」が、金を強請ろうと企てるところからテキストは始まる。「私」の予想に反し、あっさりと金を渡した「朝鮮人」は、かつての恋人「小莉」の殺害を告白する。本論は野家啓一『物語の哲学』(二〇〇五年)の議論を参照しつつ、物語するという行為が、別の物語を隠蔽する効果を持つことを確認する。その上で、最後に提示されるのは、なおも自分に都合のいい物語り続ける勇吉という登場人物に、失語した「私」が殴りつける場面だ。テキストはヨシコーや「小莉」の、まとまった意味をなさず、もはや物語を通してしか伝わらない断片としての悲鳴を提示して終わると結論づけた。

第二章では同じく又吉栄喜「巡査の首」を論じた。テキストは、沖縄県・謝元名島で生まれ育った克馬と早紀の兄妹が、祖母・タキの遺言によって、その遺骨を祖父の首の隣に埋葬するため垂下国へと向かうところからはじまる。だが、かつて植民地であった垂下国で巡査をしていた祖父・功一郎を追悼することに対して、さまざまな議論が展開されていく。「英雄」として祭祀を行おうとする者、侵略者の汚名を着せようとする者など、それぞれの主義

主張が並べられる。また、追悼を可能にする共同体そのものが存在しないことを知り、自らも夫とともに共同体から遺棄されることを望むタキ、祖父・功一郎を追悼するために垂下国の阿族を新たな共同体に再編成しようとする早紀、「報復」というかたちでの祭祀を主張する「部族長」の思惑が交錯する。本論では弔いをめぐるさまざまな主張が、功一郎の遺骨によって誘発されると論じた。最後に戦死者が放置されてきた時間の長さが表出される。つまり遺骨の場所が特定不可能で、弔いそれ自体が不可能なほど放置されていたということ、最後の場面で示すことによって、死者の遺骨が喪失してしまった時間を出来させるのである。

第三章では崎山多美「水上往還」が論じた。主人公の明子とその父・金造は、祖母・マカトの位牌を持ち帰るために島の渡し守・カーレ爺を頼って「O島」へと渡る。廃屋となったマカトの家で位牌の配置換えの「儀式」のさなか飛び出した明子は、ヤマ芭蕉の林でマカトと幼い自分の姿を視る。その夜、カーレ爺の船で島をまわり、自殺をした松尾という男の話聞いた明子は、帰りの船で、金造が自死の許しのように握っていたマカトの位牌を海に放る。本論は、まずテキストの語りが三人称であるにもかかわらず、まるで一人称の〈私〉が内在しているかのように夥しい身体性を伴っていることを指摘し、テキストの描写がすべて語り手の身体を経由したうえで言語化されていると論じた。その意味で明子の認識は常に明子自身の認識と、語り手の認識とのあわいで提示されることになる。こうした場所に「テキストとしての島」が立ち上がる。テキストと解釈者の双方向の作業によって現れる場所であり、明子が島を「解釈」することで立ち現れるマカトと明子の記憶であることを論じた。最後に明子が位牌を海に放るという行為は、自らの生きる現実と死者の世界とを画定する行為だと結論した。

最後に補論として辺見庸『1★9★3★7』論を置いた。テキストは「わたし」の読書録とでもいうように、読むという行為が記述されていく。一九三七年、中国に出征していた「父」が人を殺したか、また同様の状況で「わたし」は人を殺さずにいられるかと問う。歴史資料、証言、小説、評論、脚本草稿を読み、「わたし」は一九三七年・中国および日本のイメージを「いま」ここでテキストを読む「わたし」の場所で「記憶」しようとする。しかしイメージは常に過剰さと不足を抱えている。「わたし」はこの不足を逆手に取り、「父」の語りに対し、不可視の場所を読み込んでいく。過去のイメージが現在に到来することで、未来の危機を感じ取るからこそ読むことであり、「出来事」の継承であると論じた。そのために「わたし」は常に「読む」ことの行為性を問い直し、「いま」を問い直していく。こうした試みは本論全体の問題と響きあうものとして、補論においた。